

【東京支部だより】

東京支部、屋形船で納涼懇親会を開催

東京支部は、8月2日（木）、恒例の納涼会を開催した。屋形船での懇親会は、12年連続となるが、深川の船宿「富士見」から出船するのは9年連続となる。船宿を午後6時30分に出船、絶好の日和のなか、いつもの「北斎」号で真夏の宴を満喫した。

納涼会には酒匂支部長をはじめ58名に、5名のコンパニオンを加えた総勢63名が参集。コースは、運河から海に出て、隅田川を遡って勝鬃橋、永代橋、両国橋を過ぎたところ、ちょうど東京スカイツリーが真下から一望できる所で停泊、帰路は隅田川を再び下り船宿に戻ってくるという2時間半のコース。

船中の宴は、長澤事業企画部会委員の司会により開会。初めに酒匂支部長の挨拶が行われた後、高木理事長の来賓挨拶があり、続いて原副支部長の乾杯音頭で納涼会がスタートした。

酒匂支部長からは「売上とか数量ではなく、きちんと利益を出すことこそが本当に大事なことだ。皆さん重々分かっておられることだと思う。きちんと利益を出すということは難しい。だがここにおられる各社の方は体力をしっかりと持っている。頑張っているのだからこれ以上頑張れと言ってくれるなどと言う人もいるだろう。だから頑張ってくださいとは言いません。しかし地道に利益を確保し続けていくことに取り組んでもらいたい。先ごろ溶接協会の集まりにこの会の皆さんにもたくさんご参加いただいた。あれはいわゆる需要家の組織であるけれど、そこで一緒に勉強していくことで掴めるものも出てくるだろう。組合として少しでも皆さんのお役にたてるよう活動を展開していきたい。」との挨拶があった。

来賓の高木理事長からは「ロンドン五輪をテレビで見ていると思ったことがある。勝負に厳しい世界だから努力しても報われないときがある。だからその努力すらしなければ報われる機会すらないということだ。各種目において、若い世代が伸びてきているのを見ていると感じる。この厚板シャア業界においても、着々と次の世代が育ってきている。そしてこうした納涼会にそうした若い人たちが沢山参加してくれている、ということに期待をもちたいと思う。何度も話していることだが、夜明けは近いのだ。夜明けに備えて努力しよう。」との挨拶があった。

引続き、原副支部長の音頭で、乾杯が行われた。

その後は、長澤委員の進行により、宴会に移り、飲み放題の酒で喉を潤し、定番である江戸前の天麩羅、刺身、寿司に舌鼓を打ちながらの歓談と、多数の飛び入りもあってカラオケ等で盛り上がった。

最後は、角田・厚板部会長の三本締めで中締めを行い、帰路に就いた。

以上